

日本の DaF におけるドイツ語基礎語彙へのアプローチ

岩崎克己

0. はじめに

本稿の目的は、広島大学において 2008 年に作られたドイツ語初学者用の改訂版語彙リスト（以下、「広大語彙リスト」と略す）¹の単語を、コミュニケーション的なアプローチに基づいて作られた Glaboniat u.a. (2005)²の語彙リスト、および Herder/ BY-Korpus を基に頻度順のアプローチで作られた Tschirner(2008)³の語彙リストとそれぞれ比較することで、異なったアプローチにおける語彙リストの相違点と共通点について、具体的な事例をもとに何が言えるかを考察することである⁴。本稿ではまず、日本のドイツ語教育における基礎語彙の選定の際に、頻度順のアプローチのみに依拠しようとする場合の問題点について簡単に触れ、次に、「広大語彙リスト」について概略を紹介する。最後に、日本のドイツ語教育の文脈を踏まえたコミュニケーション・アプローチの観点から、上記の 3つの語彙リストに含まれる単語の比較を行い、それぞれの特徴について考察する。

¹ このリストの原型は、もともとは、広島大学外国語教育研究センター・カリキュラム専門部会の委託を受けて筆者が同僚の吉満たか子氏、Axel Harting 氏らとともに 2005 年から 2007 年にかけて作った基礎語彙リスト（800 語）と追加語彙リスト（350 語）である。ただし、本稿では、それを 2008 年 10 月に岩崎が個人的に改訂・補充した改訂版（約 850 語の基礎語彙リストと約 350 語の追加語彙リスト）の方を取りあげる。これらの成立の経緯については、詳しくは本稿の第 4 節参照。なお、リストそのものは、以下の URL からダウンロードできる。

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/katsuiwa/grundwortschatz.htm> (29.2.2012)

² Glaboniat, M. / Müller, M. / Schmitz, H. / Rusch, P. / Wartenschlag, L. (2005): Profile deutsch Niveau A1-A2 B1-B2 C1-C2. Berlin/München/ Wien/ Zürich/New York: Langenscheidt. なお、本稿で「Glaboniat u.a. (2005)の語彙リスト」という場合、具体的には Glaboniat u.a. (2005)付属の CD-ROM の中の Wortregister に含まれる単語や表現の全体を指す。

³ Tschirner, Erwin (2008): Grund- und Aufbauwortschatz Deutsch als Fremdsprache nach Themen - Lernwörterbuch. Cornelsen Verlag, Berlin.

⁴ 全データの比較については、「広大語彙リスト」の各単語を品詞ごとにアルファベット順に並べ、Glaboniat u.a. (2005)における言語能力のレベル(A1~B2)と Tschirner(2008)における頻度順位をそれぞれ書き込んだ対照表を作成した。それらは、以下の URL からダウンロードできる。

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/katsuiwa/grundwortschatz.htm> (29.2.2012)

1. 基本語彙の選定方法をめぐる3つのアプローチ

2011 年度独文学会秋季研究発表会におけるシンポジウム『ドイツ語基礎語彙：辞書学と外国語教育の観点から』(2011年10月16日)の開催趣旨の中で、岡村三郎らは、基礎語彙の選定方法について、大きく以下の3つのアプローチがあることを、それぞれの代表的な文献をあげながら紹介している。

- 1) 頻度を選択基準とするコーパス言語学的なアプローチ (*frequenzorientierter Ansatz*)⁵、
- 2) コミュニケーションの場面を想定しそこでの重要性を選択基準とするコミュニケーションタイプなアプローチ (*kommunikativ-pragmatischer Ansatz*)⁶
- 3) 既存の教科書や辞書などを基にした統計的なデータと内観の重なりを基準とした辞書学的なアプローチ (*lexikografischer Ansatz*)⁷。

⁵ 岡村らが挙げているのは、註2で挙げた Tschirner (2008)および以下の文献。

Jones, Randall/Tschirner, Erwin (2006): A Frequency Dictionary of German: Core Vocabulary for Learners. Routledge.

Pfeffer, J. Alan (1970): Grunddeutsch: Basic (Spoken) German Dictionary for Everyday Usage. Englewood Cliffs, Prentice-Hall.

Rosengren, Inger (1972, 1977): Ein Frequenzwörterbuch der deutschen Zeitungssprache. Die Welt, Süddeutsche Zeitung. Band 2. Lund: Gleerup.

⁶ 岡村らが挙げているのは、註1で挙げた Glaboniat u.a. (2005)および以下の文献。

Baldegger, Markus/Müller, Martin/Schneider, Günther (1980): Kontaktschwelle Deutsch als Fremdsprache, Berlin, Langenscheidt (Europarat, Rat für kulturelle Zusammenarbeit).

Deutscher Volkshochschulverband/Goethe-Institut (1972): Das Zertifikat Deutsch als Fremdsprache. Bonn/Frankfurt/München. (2. Aufl. 1977; 3. Aufl. 1985).

⁷ 岡村らが挙げているのは、以下の2つの文献。

Haderlein, Veronika (2007): Das Konzept zentraler Wortschätze: Bestandsaufnahme, theoretisch-methodische Weiterführung und praktische Untersuchung. Dissertation, LMU München: Fakultät für Sprach- und Literaturwissenschaften. (<http://edoc.ub.uni-muenchen.de/8066/>).

Schnörch, Ulrich (2002): Der zentrale Wortschatz des Deutschen. Strategien zu seiner Ermittlung, Analyse und lexikographischen Aufarbeitung, Studien zur Deutschen Sprache 26, Tübingen: Gunter Narr Verlag.

なお、岡村らのシンポジウム趣意書の中で挙げられた文献ではないが、同じく German as Foreign Language Department of Langenscheidt (1991): Langenscheidt Basic German Vocabulary. Langenscheidt, Berlin/München.等もここで言う辞書学的なアプ

岡村らはこれらのアプローチの今日的な重要性として、1) コーパス言語学的なアプローチについては、Jones/Tschirner(2006)や Tschirner(2008)の出版以降ドイツ語圏におけるコーパス研究の隆盛とともにこの方法が注目を浴びてきていることを、2) コミュニカティブなアプローチについては、CEFR⁸に準拠した Glaboniat u.a. (2005)による言語能力の記述や語彙リストが ZD (*Zertifikat Deutsch*) や SD (*Start Deutsch*) 等の国際的なドイツ語の資格試験の基準となり、それゆえ今日のドイツ語圏で出版されているドイツ語教科書の能力レベルの記述 (A1~C2) の事実上の指標にもなっていることを、3) 一種の折衷的な立場である辞書学的なアプローチについては、日本のドイツ語教科書や辞書における共通部分としてのいわゆる「重要語」が、日本における検定試験等の基礎として使われていることなどを指摘している。

こうした議論を背景に、改めて日本における基礎語彙集の歴史を振り返ってみると、Steger/Keil (1974)⁹の日本語版である『ドイツ語基本単語 2000』(日本放送協会 1974)を皮切りに、『おぼえるための基本ドイツ単語 1200』(朝日出版社 1975)、『アオスレーゼ現代ドイツ単語 2300』(朝日出版社 1983)、『ドイツ語キーワード 1000』(Newton Press 1989)、『聴いて、話すためのドイツ語基本単語 2000』(語研 1991)、『英語から覚えるドイツ単語(2280語)』(創拓社 1994)、『ドイツ語がわかる重要単語 850』(東洋出版 1995)、『独検突破単語集 3・4級必修合格 1600』(三修社 1995)、『今すぐ話せるドイツ語単語集(1600語)』(ナガセ 2002)、『効率よく覚えるドイツ重要単語 2200』(白水社 2009)、『キクタンドイツ語入門編：独検 5級レベル聞いて覚えるドイツ語単語帳(456語)』(アルク 2010)、『新・独検合格単語+熟語 1800』(第三書房 2010)等、過去 30年ほどに限ってみても十数種類の基礎語彙集が出ている¹⁰。これらの多くは、1) 場面や分野別の配列、2) 文法説明の観点からの配列、3) アルファベット順の配列等を採用しているが、語彙の選定基準については明らかにしていないものが多く、頻度順の配列方式を採用している『ドイツ語キーワード 1000』を除けば、

ローチで作られた語彙集の典型である。

⁸ Council of Europe (2001): *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge: Cambridge University Press.

⁹ Steger, Hugo/Keil, Maria (1974): *Der deutsche Mindestwortschatz 2000*. Ismaning/München.

¹⁰ このほかにも単語集としては、『例文活用 ドイツ重要単語 4000』(白水社 2003)、『日本語から引く知っておきたいドイツ語(10000語)』(小学館 2003)、『ドイツ単語 5500』(郁文堂 2000)、『読んでおぼえるドイツ単語 3000—英語からドイツ語へ』(朝日出版社 1987)、『ドイツ基本語 5000』(白水社 1971)等が出ているが、これらは収録語彙のサイズが 3,000語から 10,000語で、もはや基礎語彙集とは言えないため、ここでは含めない。

そのほとんどは、既存の複数の学習用辞書から重要単語の共通部分を抜き出すか、部分的には場面や分野などを想定したコミュニケーションなアプローチに準拠しつつも、全体としては、編集者の直感や経験に依拠して作られたものが多い。こうした「恣意的な」選定方式に対する批判として、最近では言語コーパス等の経験的なデータに基づくいわゆる「科学的な」アプローチを求める声もあり、上述のシンポジウムもそうした議論の一環として企画されたものである。

2. 日本のドイツ語教育における基礎語彙選定の際の頻度順アプローチの問題点

筆者は、日本のドイツ語教育における基礎語彙選定の基準を科学的に問い直すという議論それ自体は、きわめて正当な主張であると考え。また、今日においては、コーパス言語学的手法を抜きにした語彙リスト研究はあり得ないであろう。ただし、単にコーパスを使って頻度を出し上位語を集めれば、日本におけるドイツ語学習者用の基礎語彙集が作れるというほど問題は単純ではない。たとえば、経験的なデータに基づく「科学的な」アプローチのイメージとしては、BNC (British National Corpus) を基準スケールとして作成された英語における『JACET 8000 英単語』(桐原書店 2005)¹¹のような、語彙リストなどが想定される。しかし、英語との大きな違いは、ドイツ語には、英語の BNC や Bank of English のような当該言語を真に代表していると言える大規模な均衡コーパスが、まだ存在しないことである。これが1つ目の問題である。均衡コーパスとは、そのコーパスに含まれるテキストを選定する際に、テキストの種類やジャンルが偏らないよう、あらかじめ一定の科学的な選択基準に基づいて様々な分野のテキストを一定量ずつバランス良く集めて作成されたコーパスのことを言う。それに対し、ドイツ語のコーパスは、たとえば IDS (Institut für Deutsche Sprache) が作成したドイツ語圏で最も有名な大規模コーパス IDS-Korpora mit COSMASII (2210 万語)¹²でさえも、それに含まれるテキストの多くは一部の地方新聞や、同好会サークルのフォーラムなどの偏った資料に限られ、様々なジャンルのテキストをバランス良く集めた均衡コーパスとは言えない。これは IDS にはコーパス研究用の予算はあっても、コーパスのコンテンツそれ自体の取得のための予算がほとんど無いため、そのコンテンツは、著作権処理にお金のかからない資料や、宣伝などの目的でデータを無償で提供してくれる地方新聞等の一部のものに偏らざるを得ないからである。他方、Herder/BY-Korpus は、ドイツ語圏で唯一と言っても良い自称「均衡コーパス」であり、”Grund- und Aufbauwortschatz Deutsch als Fremdsprache” (Tschirner 2008)

¹¹ 相澤一美/石川 慎一郎/村田年 他 編著(2005): JACET 8000 英単語 - 「大学英語教育学会基本語リスト」に基づく。桐原書店。

¹² <http://www.ids-mannheim.de/cosmas2/projekt/referenz/dokutexte.html> (29.2.2012)

作成の基準となったものだが、数億語レベルの BNC 等と比べると、今日のコーパスとしては収録語数は 420 万語とやや小さい。また、その内訳は、均衡コーパスとは言うものの、1) ドイツ語圏の新聞、2) 専門書、専門雑誌から取った研究論文、3) エンターテイメント小説を含む文学作品、4) テレビドラマの会話を含む会話テキストから、それぞれ約 100 万語ずつ、また、使用説明書や解説書、法律書、契約書、ダイレクトメールや広告等の実用テキストから約 20 万語を取って作ったもの(Tschirner 2008, 4)であり、IDS のコーパスよりは資料に多様性があるものの、集めやすさのせい、やはり新聞や研究論文等の一部のジャンルの比重が高過ぎるように思われる。

2つめの問題は、日本における教育の実態や日本の文脈における言語教育という特殊事情の配慮に関わる問題である。『JACET 8000 英単語』の場合も、「BNC (British National Corpus) を基準スケールとし、日本人の英語学習者を反映した言語資料... (中略) ...から作成したサブコーパスをからめて作製」(相澤他編 2005, 2)したと、「はしがき」に書かれているように、単に BNC の頻度順リスト British National Corpus Frequency List¹³ (作成者: Adam Kilgarriff) を用いただけでなく、「日本国内の各種の英語試験や英語教材などを独自にデータベース化した」(相澤他編 2005, 10)様々なサブコーパス(Uemura / Ishikawa 2004, 333)¹⁴を基に、それぞれのサブコーパスごとにまず単語の頻度順リストを作り、それらの複数の語彙リストを比較対照しながら順位を決めている。『JACET 8000 英単語』の場合は、日本人学習者に必要だと思われる単語をリストに加えるという直接的な方法ではなく、あくまで「日本人の英語学習者を反映した言語資料」群をサブコーパスとし、対数尤度比による頻度順位の補正を行うという間接的な方法を取ってはいる。しかし、その場合も、どの資料をどの程度加えるかという度合いに応じて、日本における英語教育の特殊事情への配慮の仕方とその比重が変わり、したがってアウトプットとして出てくる語彙リストの順位と語彙も変わるという意味で、BNC のみから作られた Kilgarriff の語彙リストに大きな修正が加えられていることに変わりはなく、日本の中学校や高校の教科書等を電子化したサブコーパスから得られた語彙が最終的には、全体の 3 割程度を占めている¹⁵。

3つめの問題は、「コーパスで得られた頻度順で基礎語彙の範囲を決めて良いか」という問いと、「頻度順をそのまま学習すべき順序と考えて良いか」という問いの 2 つを混同することの危険性である。『JACET 8000 英単語』のように、そもそも日本における語学教育の現状を反映した調整がすでに行われていたり、

¹³ <http://www.kilgarriff.co.uk/bnc-readme.html> (29.2.2012)

¹⁴ Uemura Toshihiko/ Ishikawa Shin'ichiro(2004): JACET 8000 and Asia TEFL Vocabulary Initiative. The Journal of Asia TEFL (The Asian Association of TEFL), 1(1), 333-347.

¹⁵ これは、編集者の 1 人から筆者が直接聞いた話による。

あるいは4000語からなるTschirner(2008)のように、語彙リストに含まれる単語数がある程度あり、かつ、「最終的にこれらをマスターしよう」という程度のゆるやかな指針として使うのであれば、頻度順を学習順と混同してもそれほど大きな問題は起こらない。というのも、前者の場合は、初学者に必要な語彙がある程度上位に集められており、そうした調整の無い後者の場合も、4000語の規模になると、重要な単語は、頻度順での並び方は違っても全体としてある程度網羅されるからである。しかしそうした調整や配慮もないまま語彙リストの規模が数百あるいは千以下などと比較的小さくなっていくと話はまったく別である。というのも、コーパスの頻度順では、内容語よりも機能語の、また内容語の中でも名詞よりは動詞（特に機能動詞）の頻度がそれぞれ高くなる傾向があるため、基礎語彙に含まれる単語数が小さいと、名詞では本来必要な基本語の大部分が漏れたり、逆に機能語や動詞などでは最初に学ぶべき語としては重要性の低いものが大量に紛れ込んだりして、特定の品詞に語彙が偏る弊害が大きくなるからである。これらの点については、本稿の第4節で、冒頭に述べた3つの語彙リストの比較を通して具体的に述べるが、過去に日本で出版された基礎語彙集の多くが、せいぜい2000語以内であったことが示すように、日本におけるドイツ語教育の大半を占める大学や高等専門学校の教養教育における第2外国語教育においては、平均的な学習時間は、1年間（約90時間＝90分授業×週2回×15週間×2 Semester）に過ぎず、そこで考えられる現実的な基礎語彙サイズは、1000語（±200語）程度である。上述したように、こうした限定された基礎語彙サイズで頻度順を機械的に適用すると、動詞はある程度含まれるものの、それとともに使うべき名詞はほとんど基礎語彙から抜け落ちてしまい、日常的な口頭表現の大部分がまったく不可能になってしまう。したがって、コーパスを使った頻度順による語彙選定を試みる場合にも、出てきたデータの上位語をそのまま日本のドイツ語教育における基礎語彙にできるわけではなく、コーパスを使った言語研究の場合と同様、そのデータを人間（研究者あるいは教員）が分析し、それを目的との関係で評価して使う作業（具体的には、複数の語彙リスト間の比較対照、単語の取捨選択、順位の入替え、間接的あるいは直接的な単語の補充等の加工作業）が不可欠である。この点を曖昧にしていると、「基礎語彙」としては使い物にならない現実離れしたデータが一人歩きするか、あるいは、出てきたデータを手直しする過程で再び無自覚な形で「恣意的な」直感が持ち込まれることになりかねない。では、機械による処理によって得られたデータを人間が分析し評価する際の基準とは何であろうか。筆者は、この段階の議論においては、学習者が日常生活のどの場面で、どのような目的で、ドイツ語をどのように用いるのかという言語機能の側から個々の単語の重要性を評価するコミュニカティブなアプローチが、基礎語彙選定へのもう一つのアプローチとして不可避になると考える。具体的な学習者を想定して考える

限り、たとえ頻度順のアプローチから出発した場合でも、最終的にはいずれかの時点でコミュニカティブな観点を補完的な判定基準として取り入れることは不可欠なのではないだろうか。

ただし日本のドイツ語教育においてコミュニケーションの主体となる具体的な学習者とは、Glaboniat u.a. (2005)において想定されているような、ドイツ語圏で生活すること、あるいはすでに生活していることを前提にドイツ語を長期的な視点で学んでいく一般市民ではない。その大部分は、ドイツ語圏から遠く離れた日本の大学の教養教育の枠組みの中でまずは1年間という期限を切ってドイツ語を学び始める日本人の大学生である。したがって、こうした日本におけるドイツ語学習の文脈を踏まえ、学習の主たる対象者である日本人学生の自己表現の要求や知的な関心を考慮し、彼らの生活空間に根ざした表現が可能な形で初級段階の語彙を考える必要がある。効率的な語彙学習という観点に限って言っても、単語の記憶・定着を促進する要因は、どれだけ自分と関連づけられるかという処理の深さ(Craik/ Lockhart 1972)¹⁶である。2005年に広島大学で筆者らが基礎語彙の作成を委託されたとき、CEFRに準拠したGlaboniat u.a. (2005)をそのまま採用するという方針を採らず、何らかの形で日本のドイツ語教育の現状を反映しようと試みた理由もそこにあった。

3. 広島大学で作られた基礎語彙リストと追加語彙リスト

本稿冒頭の註でも述べたが、ここで取りあげる「広大語彙リスト」の原型は、2005年から2007年にかけて、広島大学の岩崎克己、吉満たか子、Axel Hartingの3人が、教養教育の枠組みでドイツ語を学ぶ大学1年生全体を対象として作成した、基礎語彙(Grundwortschatz)約800語と追加語彙(Aufbauwortschatz)約350語から成るドイツ語の語彙リストである。これは、広島大学の1年生向けの初修外国語授業である週2回(年間90時間)の「ベーシック・外国語」授業の到達目標の明確化の一環として、広島大学外国語教育研究センター・カリキュラム実施専門部会の委託を受け、初修外国語の各言語(ドイツ語・フランス語・スペイン語・ロシア語・中国語・韓国語)で作成された基語彙リストのドイツ語版である。

当時、岩崎、吉満、Hartingらの3人が、作成に当たり採用した方針は、まず第1にSD1やSD2(*Start Deutsch 1/2*)等の国際的なドイツ語の資格試験を意識

¹⁶ Craik, Fergus/ Lockhart, Robert (1972): Levels of processing: A framework for memory research. *Journal of Verbal Learning and Verbal behavior*, 11, 671-684. なお、語彙の深さという観点については、以下も参照。
門田修平編著(2003): 英語のメンタルレキシコン- 語彙の獲得・処理・学習 -。松柏社。
望月正道/相澤一美/投野由紀夫(2003): 英語語彙の指導マニュアル。大修館書店。
Nation, I. S. P. (2001): *Learning Vocabulary in Another Language*. Cambridge Applied Linguistics: Cambridge University Press.

し A1/A2 レベルの単語をある程度カバーすることであった。しかしまた同時に、前節末でも述べた理由から、第 2 として、日本におけるドイツ語学習の文脈を考慮し、日本の大学で初めてドイツ語を学ぶ日本人大学生が自己表現に必要なと思われる語彙や彼らの大学生としての日常生活に関連する語彙、さらには彼らが日本文化との対照を通じてドイツ語圏の文化を学ぶために必要な語彙にも重点を置いた¹⁷。

実際の語彙選定に当たっては、まず、以下の資料を準備した¹⁸。

1) コミュニカティブ・アプローチに基づく「Glaboniat u.a. (2005) の語彙リスト」において受容能力レベルが A2 までの単語（動詞・名詞・形容詞）約 1700 語のリスト

2) 『自己表現のためのドイツ語 (*Farbkasten Deutsch neu 1*)』(三修社 2003)、『場面で学ぶドイツ語 (*Szenen 1*)』(三修社 2006)、『コミュニケーションのためのドイツ語 (*Deutsch für Kommunikation*)』(三修社 1996)等の「日本人大学生の自己表現」に重点を置いていたいくつかの代表的な教科書に使われていた語彙を中心に集めた約 950 語のリスト¹⁹

3) ドイツ語技能検定試験 3 級・4 級に頻出する単語をまとめた約 1800 語のリスト²⁰

1) の「Glaboniat u.a. (2005) の語彙リスト」は、ドイツ語圏におけるコミュニケーションなアプローチを純粹に反映したリストであり、2) および 3) は日本のドイツ語学習者の文脈におけるコミュニケーションなアプローチと辞書学的なアプローチの両方が混在する形で作られたリストであった。実際の語彙選定手順としては、これらの 3 つのリストを対照し、それらすべてに含まれる単語、

¹⁷ 日本のドイツ語学習の文脈において語彙を考えると、「効率的な文法学習に役立つ語彙」という観点も考慮されるべきであるが、初級文法の説明に適した語彙や用例の大部分は、ここで基本方針に挙げた語の範囲内でほとんどカバーされていたので、文法学習の観点を語彙選定の基準としてわざわざ取り上げる必要性は、実際にはほとんど無かった。

¹⁸ 直接利用したわけではないが、先行事例として北大で作られていた以下の語彙リストも参照した。石川克知/佐藤俊一編(1996): 言語文化部研究報告叢書 8 <特集>ドイツ語基礎語彙研究, 北海道大学.

¹⁹ *Farbkasten Deutsch neu 1* と *Szenen 1* の単語を取りあげた理由は、それらが日本人学習者の自己表現に重点を置いたドイツ語初級用教科書の中で当時最も売っていた教科書だからである。また故関口一郎氏が作られた *Deutsch für Kommunikation* の方は、それが、コミュニケーションに重点を置いたドイツ語初級用教科書の中では最初期のものであり、かつその後の同種の教科書のスタイルに多大な影響を与えたものだからである。

²⁰ これは、飯島一泰/清水朗編著(1996): 独検合格らくらく 30 日. 郁文堂. の巻末の単語集、およびドイツ語技能検定試験 4 級の 2000 年～2005 年の出題問題に使用されていた単語の集計表を基に作った。

それぞれ2つずつのリストに含まれる単語、1つのリストにしか含まれない単語という順で、各単語を並べた基礎資料を基に、基本方針の第2に挙げた日本大学生に必要だと思われる語彙という観点から、3人の合議で約800語をリスト化し、残ったものからさらに350語を選んで追加語彙とした。作成した語彙は、動詞、名詞、形容詞、およびその他という4つの品詞カテゴリーに分け、それぞれをアルファベット順に整理した形式と、コミュニケーションの場面や分野別に19種類に分類²¹した形式との、2つの形でまとめた。また、それとは別に、約50個の重要な慣用表現 (*wichtige Redewendungen*) といわゆる教室ドイツ語 (*Klassendeutsch*) をまとめた。

当時、各言語ごとに作られた語彙リストは、2007年度末の広島大学外国語教育研究センター・外国語企画会議への答申後、公的な形では公表されなかったため、この「広大語彙リスト」(2007年版)も、ドイツ語担当教員に試案として提示・配布されただけで、その利用は各人の自由に任された。作成者の一人である岩崎は、個人的にインターネット上で閲覧可能²²にし、またこの間、自分の授業で使いながら不備を直し、2008年には必要と思われる語彙を50語程度補った改訂版²³を作り利用してきたが、大学全体での扱いとしては、事実上店ざらし状態であった。なお、作成者自身が、個人的には利用しながらも、それを一般的な基準として広く主張することをためらった理由の1つは、これらのリストの妥当性や科学性の根拠に対して確固とした自信が無かったからでもある。本稿で、この「広大語彙リスト」(改訂版)と *Glaboniat u.a. (2005)* や *Tschirner(2008)*の語彙リストとの比較を試みるのも、当時の自分たちの作業にどれだけの妥当性があったのかを別の尺度で見直してみたいという問題意識によるところが大きい。その際、「広大語彙リスト」と「*Tschirner(2008)*の語彙リスト」との比較は、頻度順アプローチという、当時筆者らが考慮していなかった全く異なる語彙選定のアプローチから見ると何が言えるかを考えるためであり、「*Glaboniat u.a. (2005)*の語彙リスト」との比較は、同じくコミュニカティブなアプローチに基づきつつも、ドイツ語圏におけるドイツ語学習の文脈と日本におけるドイツ語学習の文脈の違いについて考えるためである。

²¹ 分類の枠組みは以下の19個。1. あいさつ、2. 人物・性質、3. 家族・交友、4. 自由時間・余暇、5. 買い物、6. 住まい、7. 日課・時間、8. 休暇、9. 街・屋外、10. 体・健康、11. 職場・学校、12. 衣服、13. 飲食、14. 教室活動、15. 思考・感情、16. 行為・活動、17. 環境・自然、18. 日常・所有、19. その他。

²² <http://home.hiroshima-u.ac.jp/katsuiwa/grundwortschatz.htm> (29.2.2012)

²³ 2008年の改訂版では、元のリストの中の120語ほどの単語の扱いが変わっている。詳しい変更点は以下のURL参照。

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/katsuiwa/wortschatz/01102008.pdf> (29.2.2012)

4. 3つのリストの比較

前節で「広大語彙リスト」の選定基準として、日本の大学で初めてドイツ語を学ぶ日本人学生に必要なと思われる語彙という曖昧な表現を用いたが、本節では、その内容をさしあたり次のように具体化し、それらに必要な語彙がそれぞれのリストにどの程度含まれているかを見ていくことにする。

- (1) 日本に住む大学生が、出身、住所、大学生活、言語、飲食の好み、ファッション、スポーツ、音楽、趣味、家族・友人等の情報を含む自己紹介ができ、
- (2) 簡単な日常的な状況記述(身の回りの持ち物や自分の部屋の状況についての説明、屋内あるいは周辺地域における空間的な記述等)ができ、
- (3) 価値意識、習慣、色彩感覚や美観等における日独文化の違いを大まかに説明でき、それらに対する判断等についても適切な形容詞を使って表現でき、
- (4) 適切な語法の助動詞を用いて自分の技能や感情や要求や望み、必然性や可能性についての判断等を表現でき、
- (5) 日常の自分の生活(学生生活や休暇や1日の過ごし方等)について概略を時系列で説明でき、
- (6) 直近の過去に体験したこと等について簡単に報告することができる。

まず、「広大語彙リスト」の基礎語彙約 850 語の中からこれらの領域で必要とされるであろう単語のうちの代表的なものを具体的に取り挙げ、それに Glaboniat u.a. (2005)における能力レベルの情報(受容レベルと産出レベルの順にハイフンでつないだもの)と Tschirner(2008)における頻度順位の情報を加えて列挙する。なお、すでに述べたように、「広大語彙リスト」(改訂版)の基礎語彙は約 850 語で、追加語彙 350 語も含めると約 1200 語になる。3つのリストはそれぞれの尺度が違いうえ、基礎的な単位となる語や表現のとらえ方も違う²⁴ので、あくまで大雑把な目安でしかないが、「Glaboniat u.a. (2005)の語彙リスト」における受容能力レベルが A1 (A1-A1, A1-A2, A1-B1 等)までの語の数も約 850 語で、受容・産出の両方の能力レベルが A2 (A2-A2)までの語の数を含めると同じく約 1200 語となるので、この目安は、Tschirner(2008)のそれぞれ上位 850 語と 1200 語という基準とともに3つの語彙リストのどの部分に特定の語が含まれているか、あるいは含まれていないかを考える際の指標となる。また、同じく、リストの語彙数から大雑把に見ると Glaboniat u.a. (2005)における B1-B1 (受

²⁴ たとえば *besetzt* は「広大語彙リスト」や Glaboniat u.a. (2005)では形容詞であるが、Tschirner(2008)では *besetzen* という動詞の一変化形として扱われている。また、Glaboniat u.a. (2005)では、同じ語でも用法ごとに別の能力レベルが付与されていたり、基本単位に単語だけではなく一部熟語が含まれたりしている。

容・産出いずれのレベルも B1) はおおよそ 2000 語レベル以上の語彙に相当する。

・動詞・助動詞

まず、動詞・助動詞に関して言えば、自己発信、日常的な状況記述、価値判断等の表現に必要な動詞・助動詞の多くは、3つのリストともに上位 850 語の範囲に含まれている。

heißen (～と称する: A1-A1, 123 位)、kommen (来る: A1-A1, 61 位)、wohnen (～に住む: A1-A1, 382 位)、lernen (学ぶ: A1-A2, 203 位)、studieren (専門的に学ぶ: A1-A2, 438 位)、arbeiten (働く: A1-A1, 200 位)、trinken (飲む: A1-A1, 610 位)、essen (食べる: A1-A1, 657 位)、machen (する: A1-A1, 49 位)、sprechen (話す: A1-A1, 157 位)、spielen (球技等をする・[楽器を]演奏する: A1-A1, 197 位)、sehen (見る: A1-A1, 81 位)、lesen (読む: A1-A1, 325 位)、nehmen (取る: A1-A1, 139 位)、haben (持っている: A1-A1, 7 位)、sein (～である: A1-A1, 3 位)、bleiben (留まる: A1-A1, 112 位)、fahren (乗り物で行く: A1-A1, 169 位)、gehen (歩いていく: A1-A1, 69 位)、warten (待つ: A1-A1, 390 位)、treffen (会う: A2-A2, 289 位)、besuchen (訪れる: A2-A2, 705 位)、suchen (探す: A1-A2, 295 位)、brauchen (必要とする: A1-A2, 201 位)、kaufen (買う: A1-A1, 583 位)、bekommen (もらう: A1-A2, 235 位)、finden (～を～と思う: A1-A2, 110 位)、gefallen ([人の]気に入る: A1-A1, 538 位)、helfen (助ける: A1-A1, 408 位)、geben (与える: A1-A1, 57 位)、schreiben (書く: A1-A1, 247 位)、schicken (送る: A1-A1, 953 位)、kennen (知っている: A1-A1, 181 位)、wissen (知っている: A1-A1, 79 位)、vergessen (忘れる: A2-A2, 597 位)、glauben (信ずる・思う: A1-A2, 143 位)、denken (思う: A1-A2, 124 位)、sagen (言う: A1-A1, 46 位)、fragen (尋ねる: A1-A1, 175 位)、liegen (ある・横になっている: A1-A1, 118 位)、legen (置く・横たえる: A2-A2, 298 位)、stehen (ある・立っている: A1-A1, 87 位)、stellen (置く・立てる: A2-A2, 192 位)、sitzen (座っている: A1-A1, 263 位)、setzen (据える: A2-A2, 229 位)、hängen (掛かっている/掛ける: A2-A2, 690 位)、bringen (持ってくる: A1-A2, 162 位)、verstehen (理解する: A1-A1, 223 位)、versuchen (試みる: A1-A1, 224 位)、ankommen (到着する: A1-A1, 716 位)、aufstehen (起床する: A1-A2, 1176 位)、zurückkommen (戻って来る: A2-B1²⁵, 1113 位)、können (～できる: A1-A1, 23 位)、wollen (～するつもりである: A1-A2, 65 位)、dürfen (～しても良い: A1-A2, 142 位)、müssen (～しなければならない: A1-A1, 45 位)、sollen (～すべきである: A1-A2, 63 位)、mögen (～かもしれない: A1-A1, 151 位)

²⁵ 正確に言うと、zurückkommen は「Glaboniat u.a. (2005)の語彙リスト」の中には直接含まれていないが、前綴り zurück- の能力レベルの記述として A2-B1 が登録されている。

上記の動詞のうち、下線の付いている8つの動詞とイタリックになっている2つの動詞は、それぞれ、「Glaboniat u.a. (2005)の語彙リスト」と「Tschirner (2008)の語彙リスト」においてのみ、1200語レベルには含まれるが850語レベルには含まれない例である。しかし、それ以外の動詞は、3つのリストに共通して上位850語以内に含まれている。このことからわかるように、動詞・助動詞に関しては、どのアプローチを採ろうとも、必要な動詞の大多数はカバーされていると言える。

ただし、「Tschirner(2008)の語彙リスト」については、明らかに重要動詞だと思われるのに、上位1200語に入らない例がいくつか見られる。たとえば、学生が自分の趣味について語る際、その多くは音楽鑑賞を挙げるがその際に必要な *hören* (聴く: A1-A1, 1560位) や、趣味に関する話題で1クラスに必ず何人かは使う *malen* (絵を描く: A1-A2, 1859位) 等がそれである。また携帯電話は今や現代人の必需品であるが、それを使って行う *anrufen* (電話を掛ける: A1-A2, 1388位) や *telefonieren* (電話で話す: A1-A1, 3357位) も、また *waschen* (洗う: A1-A1, 1783位)、*mitbringen* (持って行く: A1-A1, 1802位) 等の日常的な動詞も上位1200語には含まれていない。さらに、*abfahren* (出発する: A1-A2, ×) や *jobben* (バイトする: ×, ×) に至っては、そもそも4000語のリストにさえ入らない。これらは、*jobben* を除けば、「広大語彙リスト」でも「Glaboniat u.a. (2005)の語彙リスト」でもともに上位850語に含まれているので、その違いが目立つ例である。他にも、日本人の学生が趣味などの表現でよく使う、*zeichnen* (イラスト等を描く: B1-B1, 1811位)、*sammeln* (収集する: B1-B1, 1326位)、*angeln* (釣りをする: B1-B2, ×) や日課の表現などで使われる *aufräumen* (片付ける: B1-B1, 3963位) 等も、「Tschirner(2008)の語彙リスト」では上位1200語には入らない²⁶。

それに対し、「Tschirner(2008)の語彙リスト」の上位語には、初級者用の語彙と言われると、多くの教員が違和感を抱くであろう動詞が多く含まれている。それらの一部を試しに上位1000語の範囲内で20個ほどリストアップしてみると、以下のものがある。

gelten(×, 185位), *bestehen*(B1-B2, 210位), *betreffen*(×, 388位), *vergehen*(×, 400位), *ergeben*(×, 432位), *erfolgen*(×, 570位), *vorliegen*(×, 681位), *erhöhen*(B2-B2, 731位), *vorhanden*(×, 733位), *beziehen*(×, 718位), *beteiligen*(×, 770位), *umfassen*(×, 785位),

²⁶ ただし、これら3つの動詞は、「Glaboniat u.a. (2005)の語彙リスト」の能力記述でもB1-B1レベルであり、したがって2000語レベルの語彙である。その逆に、「Glaboniat u.a. (2005)の語彙リスト」では850語レベルだが、「広大語彙リスト」には含まれない動詞には *heizen* (暖房する: A1-A2, ×)、*küssen* (キスする: A1-A2, 2629位) 等がある。ただし、これら以外では、すでに述べたように両者の上位語には大きなずれはない。

aufbauen(×, 832 位), überzeugen(×, 872 位), drohen(×, 875 位), betreiben(×, 928 位), vertreten(×, 939 位), benötigen(×, 968 位), verhindern(×, 973 位), erwähnen(×, 985 位)。

上記の動詞群は、bestehen と erhöhen を除くと括弧内の具体的な能力レベルの記述が×印であることからわかるように、Glaboniat u.a. (2005)の判断でもそのほとんどが B2 レベルにさえ含まれない。上記の動詞は、主に論文や専門書、新聞などの書き言葉の論説文や法律の条文に多く出てくる動詞である。すでに述べたように、日本のドイツ語教育の大半を占める大学や高等専門学校の教養教育における学習時間は、1年間 90 時間程度であり、そこで考えられる基礎語彙数は、1000 語 (±200 語) 程度である。このレベルの学習者が読めるとはとうてい考えられない新聞や専門書が大半を占めるコーパスの頻度順で最初の 1000 語レベルの基礎語彙を機械的に決めようとしたら何が起るかをこの例は如実に示している。

・名詞

しかしながら、頻度順アプローチの問題点が最も顕著に浮かび上がるのは、動詞ではなく、むしろ名詞の場合である。以下では、「広大語彙リスト」に含まれている名詞を取りあげ具体的に検討していくが、日本人の学生が、家族関係の表現で必要とする Großvater(祖父: A1-A1, 3642 位)、Großmutter(祖母: A1-A1, 2834 位)、Onkel(おじ: A2-B1, 2852 位)、Tante(おば: A2-B1, 1663 位)、Geschwister(兄弟姉妹: B1-B2, 3094 位)などの多くは、「Tschirner (2008)の語彙リスト」では上位 2500 語にさえ入らない。飲食物を表す名詞は上位 1200 語内には 1 つもなく、そもそも含まれているのは、Kaffee(コーヒー: A1-A1²⁷, 1423 位)、Fisch(魚: A1-A1, 1626 位)、Fleisch(肉: A1-A1, 1627 位)、Wein(ワイン: A2-B1, 1643 位)、Bier(ビール: A2-B1, 1716 位)、Brot(パン: A1-A1, 1760 位)、Ei(卵: A1-A1, 2608 位)、Tee(紅茶: A1-A1, 2717 位)、Milch(牛乳: A1-A1, 2789 位)、Käse(チーズ: A1-A1, 3615 位)、Apfel(りんご: A1-A1, 3842 位)、Zwiebel(タマネギ: A2-B1, 3387 位)、Kartoffeln(じゃがいも: A1-A1, 3314 位)のみである。しかもその半数は 2500 語以降である。Salat(サラダ: A1-A1)、Reis(米・ご飯: A1-A1)は、「Tschirner(2008)の語彙リスト」には登場しない。

学生の中には何らかの楽器のできるものが多いが、楽器でリストに入っていない

²⁷ 「Glaboniat リスト」の語彙リストには冷たい飲み物には個々に能力レベルの記載があるが、温かい飲み物に関しては、Heiße Getränke というカテゴリー情報のみで、具体的な能力レベルの記載はない。しかし、関連する語彙のレベル記述から、少なくとも、Kaffee と Tee に関しては、A1-A1 と見なしてかまわないと思われる。同様に、「Glaboniat リスト」の語彙リストには Ei は含まれていないが、これは、単純な記載ミスだと思われる。Fisch/ Fleisch/ Käse 等の基本食品がいずれも A1-A1 であることから Ei も A1-A1 と見なした。

るのは、Klavier (ピアノ: Δ^{28} , 2779 位) のみで、それ以外は、Gitarre (ギター: -) や Geige (バイオリン: -) を含めすべて含まれていない。スポーツをする学生は多いが、Fußball (サッカー: A1-A2, 1500 位)、Tennis (テニス: A2-B1, 2952 位) 以外は、スポーツの名称はそもそも含まれていない。若い世代が特に気を遣うファッションや身の回りの持ち物についても、Kleid (ワンピース/衣類: A2-A2, 1684 位)、Schuhe (靴: A1-A1, 2117 位)、Hose (ズボン: A1-A1, 2426 位)、Hemd (シャツ: A1-A1, 2537 位)、Mantel (コート: A1-A1, 2548 位)、Hut (帽子: A2-A2, 2693 位)、Rock (スカート: A2-A2, 3230 位)、Anzug (スーツ: B1-B1, 3544 位)、Jacke (上着: A1-A1, 3895 位) とほとんどすべて 2000 語以降であり、Jeans (ジーンズ: A1-A1)、Socken (ソックス: A2-A2)、Strümpfe (ストッキング: A2-B1) はそもそもリストに登場しない。持ち物についても、Uhr (時計: A1-A1, 351 位) 以外は、1500 語以降に Tasche (かばん: A1-A2, 1641 位)、Schlüssel (カギ: A1-A1, 2325 位)、Handy (携帯電話: A2-A2, 2470 位)、Brille (メガネ: A2-A2, 3428 位)、Heft (ノート: A1-A1, 3603 位) がかるうじて入っているだけで、Taschentuch (ハンカチ: B1-B2)、Portmonee (財布: A2-A2)、Lehrbuch (教科書: -)、Wörterbuch (辞書: A1-A2)、Stift (筆記用具/ペン: A1-A2)、Bleistift (鉛筆: A1-A2)、Kugelschreiber (ボールペン: A1-A2)、Studentenausweis (学生証: -)、Regenschirm (傘: -)、などの学生の持ち物の多くは、4000 語のリストにさえ含まれていない。日本人学生が自宅やアパートの自分の部屋に所有しているものについても、上位 1000 語に入っているのは、Tisch (机: A1-A1, 496 位) と Bett (机: A1-A1, 656 位) と Computer (コンピュータ: A1-A1, 741 位) のみで、その他は Stuhl (いす: A1-A1, 1536 位)、Fernseher (テレビ: A1-A1, 2419 位)、Regal (本棚: A2-A2, 2644 位)、Schrank (タンス: A1-A1, 3232 位)、Lampe (スタンド: A2-A2, 3899 位) と、軒並み順位は低く、Waschmaschine (洗濯機: A2-A2) や Kühlschrank (冷蔵庫: A1-A1) はリスト落ちである。道案内などで大事な情報は、方向を指示する表現²⁹と案内の目安となる交差点や建物や店舗名などであるが、それについても、上位 1000 語に入っているのは、Bank (銀行: A1-A1, 511 位) のみで、それ以外は、Flughafen (空港: A1-A2, 1935 位)、Post (郵便局: A1-A1, 1944 位)、Bahnhof (駅: A1-A2, 1956 位) Café (カフェ: A1-A1, 2349 位) とほぼ 2000 語レベルであり、Supermarkt (スーパー: A1-A1)、Kaufhaus (デパート: B1-B1)、Buchhandlung (本屋: B1-B1)、Bäckerei (パン屋: B1-B2)、Kreuzung (交差点: A1-A1)、などは 4000 語のリストに含まれない。

²⁸ 「Glaboniat リスト」の語彙リストでは楽器についても Klavier/ Gitarre/ Geige など、9 個ほど登録されているが、Musikinstrument というカテゴリー情報のみで、具体的な能力レベルの記載はない。

²⁹ 方向を表す副詞も Tschirner(2008)では上位 1200 語には入らず、links (左へ: A1-A1, 1446 位)、rechts (右へ: A1-A1, 1449 位) はなんとか出てくるが、geradeaus (まっすぐ: A1-A1) はそもそもリストにない。

このように、Tschirner(2008)のようなドイツ語圏で現在利用可能なコーパスを用いて作った語彙リストの頻度順をそのまま適応して、その上位語を日本のドイツ語教育における初級者用の基礎語彙（1000 語程度）としようとするれば、核となる動詞はあってもそれと使える名詞はほとんど含まれないため、学習者は、核家族の範囲内でしか家族について語れず、自分の趣味については、「読書」以外何も挙げられず、飲食物の好み、スポーツについては何1つ言えず、自分の持ち物については「時計」のみ、自分の部屋の中にあるものについては、「机」と「ベッド」と「コンピュータ」について触れられるだけ、道案内では、方向を表す表現はいつさい使えず、目安になる建物は「銀行」だけという悲惨な結果になってしまう。

ただし、これは、すでに第2節でも触れたように、コーパスの頻度順という指標特有の性質から必然的に生じる現象でもある。そのことを、たとえば *spielen* (A1-A1, 197 位) という動詞を例に取って考えてみよう。インターネット上ですこし捜せば、以下のような *spielen* を含む例文は次々と見つかる。

Tim spielt Fußball.

Tennis kann ich bis ins hohe Alter spielen.

Lasst uns Baseball spielen!

In seiner Freizeit spielt Harry Redknapp gerne Golf.

Wer kann Geige spielen?

Wie gut spielst du Gitarre?

Er spielt gern mit dem Hund.

Mein Großvater spielt Schach.

Meine Mutter spielt mit dem Gedanken, in ein Altersheim zu ziehen.

Mein Neffe spielt gerne mal bei uns am Computer.

Nein, das spielt keine Rolle.

ここだけで、*spielen*、は延べ数で 11 回使われているが、他の名詞は全て 1 回だけである。したがってこの例文から得られる使用頻度では *spielen* のみが上位に入り、他の名詞の重要性は統計的な数値としては表れない。しかし、忘れてはならないのは、*spielen* だけが単独で出てくることはほとんどなく、これらのどれかの名詞（正確には名詞句やその名詞を含む前置詞句）と一緒に使われない限り、実際には *spielen* 自体も使えないことである。したがって、語彙リストの範囲が、これらの共起する名詞の順位までカウントされるほど十分に拡大されない限り、言語の使用実態は見えてこないし、学習の目安となる語彙リストとしては意味をなさない。その拡大範囲が、どの程度になるかは一概に言えないが、上記の例で使われている名詞 17 個のうち、「Tschirner(2008)の語彙リスト」

に含まれるのは、Fußball (1500 位)、Tennis (2952 位)、Alter (722 位)、Freizeit (1156 位)、Hund (1048 位)、Mutter(228 位)、Großvater(3462 位)、Gedanke (531 位)、Computer (2952 位)、Rolle (398 位) の 10 個のみであり、これらは、3000 語の範囲でカバーできるが、残りの 7 つはそもそも 4000 語の範囲に入らない。そのことから考えても、言語教育のための基礎資料という観点で言うと、おそらくもう少し大きな規模が必要になるであろう。その意味で、コーパスを使った頻度順語彙リストを 1000 語ずつ 8000 語レベルまで分類した『JACET 8000 英単語』の試みは、頻度順リストの仕様やサイズを考えるうえで示唆的である。ただし出現回数における差が有意となるだけの数のデータをその順位まで集めようとするれば、少なくとも Herder/ BY-Korpus よりは大きな「均衡コーパス」が必要になるであろう。

なお、これまで述べてきた例とは逆に、動詞の場合と同様、「Tschirner(2008)の語彙リスト」の上位語には、初級者用の語彙と言われると、多くの教員が違和感を抱くであろう抽象的な名詞が非常に多い。紙幅の関係で、ここでも全ては挙げられないので、その一部を上位 1000 語の範囲内で 20 個ほどリストアップしてみる。これらも、政治経済や学問研究の分野の論文・論説文などで多用されそうな表現である。

Grund (根拠: B1-B1, 231 位)、Bereich (領域: B1-B1, 259 位)、Entwicklung (発展: ×, 305 位)、Abbildung (図: ×, 441 位)、Rahmen (枠組み: ×, 462 位)、Regel (規則: B1-B2, 486 位)、Beziehung (関係: B1-B1, 494 位)、Verhältnis (状況: B2-B2, 519 位)、Zusammenhang (関連: ×, 553 位)、Angebot (申し出: B1-B2, 586 位)、Anspruch (請求: ×, 709 位)、Anwendung (適用: ×, 717 位)、Verfahren (手続き: ×, 745 位)、Maßnahme (処置: ×, 757 位)、Bevölkerung (人口: B1-B1, 771 位)、Bedingung (条件: B1-B1, 806 位)、Untersuchung (調査: B1-B1, 830 位)、Schwierigkeit (困難: B1-B2, 868 位)、Grundlage (基礎: ×, 971 位)、Zustand (状態: ×, 975 位)

以上、主に「広大語彙リスト」と「Tschirner(2008)の語彙リスト」の比較を行ってきたが、次に、「広大語彙リスト」と「Glaboniat u.a. (2005)の語彙リスト」の中の名詞の重なり具合を見てみよう。「広大語彙リスト」850 語に含まれる名詞 455 個のうち「Glaboniat u.a. (2005)の語彙リスト」の上位 850 語程度に相当するであろうと思われる、受容レベル A1 の名詞は 297 個 (約 65.4%) である。また受容レベル A2 の名詞も 127 個(28.0%)であり、両者を合わせると 93%を超え、全体として語彙レベルがかなり重なっているのがわかる。それに対し、上位約 2000 語以降に相当すると思われる、受容レベルが B1 以上の名詞は、455

個中、以下にあげる 30 個 (約 6.7%) しか無い。

Angestellter (会社員: B1-B1, 2344 位)、Anzug (スーツ: B1-B1, 3544 位)、Beamter (公務員: B1-B1, 1891 位)、Buchhandlung (書店: B1-B1, ×)、Dame (婦人: B1-B1, 1353 位)、Hals (首・のど: B1-B1, 1823 位)、Kaufhaus (デパート: B1-B1, ×)、Neujahr (新年: B1-B1, ×)、Prüfung (試験: B1-B1, 1208 位)、Schauspieler/-in (俳優: B1-B1, 2205 位)、Taschentuch (ハンカチ: B1-B2, ×)、Zeitschrift (雑誌: B1-B2, 2496 位)、Bäckerei (パン屋: B1-B2, ×)、Geschichte (歴史学・お話: B1-B2, 275 位)、Geschwister (兄弟姉妹: B1-B2, 3094 位)、Kellner / -in (ウェイター: B1-B2, ×)、Rathaus (市役所: B1-B2, 3122 位)、Roman (小説: B1-B2, 1038 位)、Brust (胸: B2-B2, 1676 位)、Federmäppchen (筆入れ: B2-B2, ×)、Schal (マフラー: B2-B2, ×)、Naturwisscehnschaft (自然科学: B2-×, 3777 位)、Ski (スキー: B2-×, ×)、Lehrbuch (教科書: ×, ×)、Radiergummi (消しゴム: ×, ×)、Regenschirm (雨傘: ×, ×)、Schulter (肩: ×, 1065 位)、Studentenausweis (学生証: ×, ×)、Tempel (寺・寺院: ×, ×)、Schinto-Schrein (神社: ×, ×)

その逆に、「Glaboniat u.a. (2005)の語彙リスト」では 850 語レベルだが、「広大語彙リスト」には含まれない名詞には、以下のものがある。これらは、食品や香辛料名あるいは、実際にドイツ語圏で生活する際には必要になる概念を表す名詞などである。

Rindfleisch (牛肉: A1-B1, ×)、Kalbfleisch (仔牛の肉: A1-B1, ×)、Konfitüre (粒入りジャム: A1-B1, ×)、Pfeffer (胡椒: A1-A1, ×)、Essig (酢: A1-A2, ×)、Eingang (入口: A1-B1, 2674 位)、Ausgang (出口: A1-B1, 3553 位)、Dokument (公文書: A1-B1, 3179 位)、Staatsangehörigkeit (国籍: A1-B2, ×)、Postleitzahl (郵便番号: A1-B2, ×)

・形容詞

形容詞には、大きく分けると、groß/ klein や lang/ kurz のように、外的世界の物理的性質を記述し、それゆえ、ある程度の客観性を反映した形容詞と、interessant/ langweilig や schön などのようにもともと個人の判断や価値意識によって成り立ち、それゆえ、主観性の強い形容詞がある。「主観性の強い形容詞」は、sein とともに賓辞として使うと、文脈によっては子供っぽいニュアンスを与えるため、通常は「(～を) ～と思う」という意味の finden 等と組み合わせて使用することが多い。価値判断の形容詞は対象や出来事に意味づけする機能があるので、精神年齢の比較的高い学習者にとっては重要な語彙である。また、対象の抽象的な記述に使うケースが多い「客観性を反映した形容詞」とは異なる。

り、印象に残る練習が組み立てやすく(=「処理の深さ」³⁰を追求しやすく)、学習の成果が上がりやすい形容詞でもある。実際、筆者が行った簡易調査の結果から見ても初級学習者の語彙の中では、定着率が比較的良い(岩崎 2012, 36)³¹。しかし、「広大語彙リスト」(斜体は追加語彙に当たる形容詞)に含まれる、「主観性の強い形容詞」の大半は、「Tschirner(2008)の語彙リスト」では、上位 1200 語には入らず、その範囲の語彙では多様な価値判断を表現することは難しい³²。

bequem (快適な: B1-B1, 2460 位)、billig (安い: A1-A2, 1675 位)、cool (いける・かっこいい: B2-B2, ×)、elegant (優雅な: B2-B2, 3084 位)、freundlich (友好的な・親切な: A2-A2, 1555 位)、gemütlich (居心地よい: A2-A2, 3456 位)、hübsch (かわいい: A1-A2, ×)、intelligent (知的な: A2-A2, 3470 位)、langweilig (たいくつな: A1-A1, 2925 位)、musikalisch (音楽的な: Δ, 2268 位)、nett (親切な・感じの良い: A1-A1, 1486 位)、sportlich (スポーツの・スポーティーな: A2-B1, 1905 位)、süß (かわいい・甘い: A1-A1, 3038 位)、sympathisch (好感の持てる: A1-A2, ×)、wunderbar (すばらしい: A1-A2, 1886 位)

angenehm (心地よい: B1-B1, 1751 位)、dumm (ばかな・愚かな: A1-A1, 2518 位)、faul (怠惰な・腐った: B1-B1, ×)、fleißig (勤勉な: B1-B1, ×)、herrlich (すばらしい: B1-B1, 3011 位)、klug (賢い: ×, 3017 位)、komisch (おかしな・変な: A2-B1, 2265 位)、lustig (愉快的な・陽気な: A2-B1, 2266 位)、nützlich (役に立つ: B1-B2, 3117 位)、romantisch (ロマンチックな: ×, ×)、schick (シックな: B1-B1, ×)、schrecklich (ひどい・恐ろしい: A1-A2, 2116 位)、unmöglich (不可能な・ひどい: A2-A2, 1745 位)

それと対照的なのが、以下のような、物理的性質の記述に用いる「客観性を反映した形容詞」である。これらは、「Tschirner(2008)の語彙リスト」でも上位語に含まれ、3つのリストのいずれにおいても 850 語の範囲で必要な語彙をほぼカバーできる。

alt (古い・年をとった: A1-A1, 116 位)、breit (幅広い: A2-B1, 730 位)、eng (狭い: A2-A2, 593 位)、früh (早い: A1-A2, 324 位)、groß (大きい・背が高

³⁰ 註 16 参照。

³¹ 岩崎克己(2012): 日本の初修外国語教育における基礎語彙へのアプローチ。『広島外国語教育研究』第 15 号, 21-48

³² また、自分自身の心理状態や体調を表す形容詞も、glücklich 以外は、同様に「Tschirner(2008)のリスト」では、上位語には入らない。

müde (疲れた・眠い: A2-A2, 2077 位)、traurig (悲しい: A1-A1, 1874 位)、froh (楽しい: A2-A2, 1421 位)、fröhlich (陽気な: A2-B1, 3190 位)

い: A1-A1, 74 位)、hoch (高い: A1-A2, 129 位)、klein (小さい・背が低い: A1-A1, 114 位)、kurz (短い: A1-A2, 205 位)、lang (長い: A1-A2, 95 位)、langsam (ゆっくりとした: A1-A1, 606 位)、neu (新しい: A1-A1, 80 位)、schnell (速い: A1-A1, 234 位)、spät (時間的に遅い: A1-A1, 171 位)、stark (強い: A1-A2, 207 位)、tief (深い: A1-A2, 508 位)、weit (離れた・だぶだぶの・かなり: A1-A1, 122 位)

さらに、「Tschirner(2008)の語彙リスト」の上位語には、動詞や名詞の場合と同様、初級者用の語彙と言われると、多くの教員が違和感を抱くであろう、政治経済、学問研究の分野でよく使われる中級の語彙や、さらにそれ以上のレベルの形容詞も多く含まれている。ここでも、紙幅の関係で全ては挙げられないので、後者の例だけ、その一部を上位 1000 語の範囲内で 20 個ほどリストアップする。これらも、名詞の場合と同様に、主に論文や論説文などで使われる書き言葉で、そのほとんどが抽象的な意味合いを持って副詞的に使われる形容詞である。

allgemein (全般に: ×, 341 位)、gering (ごくわずかの: ×, 468 位)、tatsächlich (実際に: B1-B2, 515 位)、zusätzlich (そのうえ: B1-B2, 520 位)、relativ (相対的に: ×, 546 位)、speziell (特に: ×, 573 位)、entscheidend (決定的な: ×, 588 位)、ständig (しよっちゅう: B1-B2, 614 位)、notwendig (必然的な: B1-B2, 620 位)、grundsätzlich (根本的に: ×, 723 位)、künftig (将来的に: ×, 742 位)、zahlreich (数多くの: ×, 841 位)、erfolgreich (成功している: ×, 843 位)、regelmäßig (規則的な: B1-B2, 860 位)、staatlich (国の: B1-B1, 869 位)、ehemalig (前の: ×, 876 位)、erforderlich (必要な: ×, 893 位)、lediglich (ただ: ×, 898 位)、unabhängig (~に依存せず: ×, 902 位)、unmittelbar (直接的に: ×, 909 位)

以上、形容詞についても、主に「広大語彙リスト」と「Tschirner(2008)の語彙リスト」の比較を行ってきたが、本節の最後に、「広大語彙リスト」と「Glaboniat u.a. (2005)の語彙リスト」の重なり具合も見てみよう。形容詞の場合も、「広大語彙リスト」約 850 語に含まれる形容詞 103 個のうち「Glaboniat u.a. (2005)の語彙リスト」の上位 850 語程度に相当するであろうと思われる、受容レベル A1 の形容詞は 74 個 (約 72.5%) である。また、受容レベル A2 の形容詞も 22 個 (21.6.0%) であり、両者を併せると 94% を超え、形容詞の場合も名詞の場合と同様、全体として語彙レベルがかなり重なっている。それに対し、上位約 2000 語以降に相当すると思われる受容レベルが B1 以上の形容詞は、103 個中、以下にあげる 6 個 (約 5.9%) しか無い。

bequem (快適な: B1-B1, 2460 位)、persönlich (個人的な: B1-B1, 483 位)、rund (丸い: B1-B1, 318 位)、pünktlich (時間どおりの: B1-B2, ×)、cool (いけてる: B2-B2, ×)、elegant (優雅な: B2-B2, 3084 位)

その逆に、「Glaboniat u.a. (2005)の語彙リスト」ではだいたい 850 語レベル(斜体字の形容詞は一部 850 語レベルを超える)だが、「広大語彙リスト」には含まれない形容詞には以下のものなどがある。これらも、名詞の場合と同様、その多くは食品関係の語彙か、ドイツ語圏では良く聞かすが、ドイツ語を学習する教室ではあまり聞かれない語彙である。

fein (細かな: A1-A1, 1238 位)、blöd (ばかな: A1-A1, 2669 位)、aktuell (話題の: A1-A2, 779 位)、zäh (堅い: A1-B1, ×)、gebraten (焼いた: A1-B1, 3859 位)、haltbar (日持ちする: A1-B1, ×)、pauschal (全部込み: A2-A2, ×)、gratis (無料: A2-B1, ×)

5. まとめとして

第4節では、日本のドイツ語教育の文脈を踏まえたコミュニカティブ・アプローチの観点から、3つの語彙リストに含まれる単語の比較を行ってきた。それからわかったことを簡単にまとめると、以下のようになる。

- 1) 動詞・助動詞に関しては、どの語彙リストでも必要な語彙の多くが上位語の範囲(850語あるいは1200語程度まで)でカバーされている。
- 2) 名詞に関しては、「Tschirner(2008)の語彙リスト」の上位語の範囲では、日常的な口頭表現に必要な語彙の多くが含まれない。この観点では、「広大語彙リスト」や「Glaboniat u.a. (2005)の語彙リスト」の方は必要な語彙をある程度カバーしている。
- 3) 形容詞に関しては、2つのタイプがあり、「客観性を反映した形容詞」に関しては、どの語彙リストでも必要な語彙の多くが上位語の範囲でカバーされるが、[主観性の強い形容詞]に関しては、「Tschirner(2008)の語彙リスト」の上位語では対応できず、「広大語彙リスト」や「Glaboniat u.a. (2005)の語彙リスト」の方はカバーできる。
- 4) 「広大語彙リスト」と「Glaboniat u.a. (2005)の語彙リスト」の比較では、一般的な日常表現に関する名詞については、どちらも大きな差はない。
- 5) ドイツ語圏で生活する際には必要となると思われる語彙は、やはり「Glaboniat u.a. (2005)の語彙リスト」では上位語でもカバーされているが「広大語彙リスト」には少なく、逆に、日本の文化(Tempel/Neujahr等)や大学生の持ち物や大学生活に関する話題に関係する語彙等は、後者のリストではカバーされているが前者のリストには少ない。

6) 頻度順のアプローチで作られた「Tschirner(2008)の語彙リスト」の上位語の中には、動詞、名詞、形容詞のすべてについて、論説文や学問的なテキストを読むのに必要だと思われる一群の中級以上の語彙が含まれている。

以上をまとめると、おおよそ次のような表になる。

表1：3つのリストそれぞれの上位語に含まれる語彙

| | 語彙の種類 | 広大 | Glaboniat | Tschirner |
|----|-------------------------------|----|-----------|-----------|
| 1 | 世界のどこにしよう一般的な日常生活や自己表現に必要な動詞 | ○ | ○ | ○ |
| 2 | 世界のどこにしよう一般的な日常生活や自己表現に必要な名詞 | ○ | ○ | × |
| 3 | ドイツ語圏に滞在するなら重要になると思われる名詞 | △ | ○ | △ |
| 4 | ドイツ語文化圏とアジアや日本文化圏の対照に役立つ名詞 | ○ | △ | × |
| 5 | 大学生活や学生の日常(持ち物・服装・バイト等)に関する名詞 | ○ | △ | × |
| 6 | 客観性のある程度反映した形容詞 | ○ | ○ | ○ |
| 7 | 主観性の強い形容詞 | ○ | ○ | × |
| 8 | ドイツ語圏に滞在するなら重要になると思われる形容詞 | △ | ○ | × |
| 9 | ドイツ語文化圏とアジアや日本文化圏の対照に役立つ形容詞 | ○ | △ | × |
| 10 | 政治経済や科学分野の論説文や論文等に必要と思われる動詞 | × | × | ○ |
| 11 | 政治経済や科学分野の論説文や論文等に必要と思われる名詞 | × | × | ○ |
| 12 | 政治経済や科学分野の論説文や論文等に必要と思われる形容詞 | × | × | ○ |

筆者は、上記表1の番号で言うと、コミュニケーション能力のコアの部分に関わる1、2、6、7の語彙が、基礎語彙の中にはまず含まれるべきであり、その次に、5、4、9の語彙が来るべきであり、3、8の語彙はその後に回すべきであると考え。というのも、本稿第2節で述べたように、日本のドイツ語教育における学習者の多くは、ドイツ語圏から遠く離れた日本の大学の教養

教育の枠組みの中でまずは1年間という期限を切ってドイツ語を学び始める日本人の大学生であり、最初から留学を考えていたり、ドイツ語関連の専門へ進もうと考えている学生は、ほとんどいないからである。したがって、日本で大学生活を送る学習者の知的な関心や日常生活に密着した語彙、ドイツの社会や言語文化を取りあげる場合もそれを日本の文化と対照させて語れるようなエモーショナルな側面を含んだ語彙にまず重点を置き、学習の動機付けを図るべきである。というのも、それらを通して、ドイツ語やドイツの言語文化に学生が関心を持って初めて、留学等の次のステップが生まれるからである。実際、筆者が勤務する広島大学でも、2年次以降にドイツ語関連の専門を選択したりドイツ留学を目指す学生の大半は、教養教育における1年次のドイツ語学習を通してドイツ語圏の言語文化に関心を持ったことをその志望動機に挙げている。なお、教養教育の枠組みを越えてドイツ語学習を続け、中級以上の段階に至った場合には、表1の10~12の領域の語彙をシステムティックに教えていくことも重要であろう。

最後に、日本独文学会あるいはドイツ語教育部会レベルでのドイツ語基礎語彙集作成プロジェクトとでも言うべきものに対する期待を述べ、本稿を終えたい。筆者には、上述したような日本人の学習者の典型的な学習プロフィールを念頭に置きつつ、初級から中級（さらには上級）に至るドイツ語の語彙リストを、そろそろ学会として作成すべき時期に来ているように思われる。その場合は、『JACET 8000 英単語』がBNCを基準スケールとしたように、たとえばTschirner(2008)の語彙リストや他の（理想的にはもう少し規模が大きく均整の取れた）ドイツ語コーパスから作られた語彙リストを基準リストとし、それに、他のアプローチで作られた複数の語彙リストやデータを参照しながら何人かの専門家が合議をしながら作って行くことになるだろう。そうしたドイツ語教育の分野における語彙リストの研究の進展に本稿が少しでも役に立てば幸いである。